地域コミュニティの防災力

連載 第22回

広島市土砂災害の被災地から

常葉大学大学院　環境防災研究科　教授
重川　希志依

本年8月20日未明、広島市で大規模な土砂災害が同時多発し、本稿執筆時点で、死者72名、行方不明者2名が発生する大惨事となりました。また、救出活動中に3歳児を抱いたまま、土砂に巻き込まれて一人の消防職員が殉職するという、まことに痛ましい事態が起こってしまいました。災害発生から2週間後に被災現場に立ち、痛感したことは、日本の至るところで見られるような地形条件で、今回の土砂災害が発生していたということです。広島市で被害が集中した安佐南区や安佐北区に限らず、どこで起きても不思議ではない、他人ごとではない災害だということを、私たちはしっかりと認識する必要があると思います。

既に報じられているとおり、8月19日16時過ぎ、広島地方気象台から大雨洪水注意報が出され、同日の21時26分に大雨洪水警報に切り替えられました。広島市安佐北区にある三入地域気象観測所では、8月20日午前1時からの降水量が28.0ミリメートル、午前2時～3時の降水量が80.0ミリメートル、同3時～4時の降水量が101.0ミリメートルいう猛烈な雨量が観測され、午前4時からの1時間雨量は12.5ミリメートル、その後降雨はおさまりました。

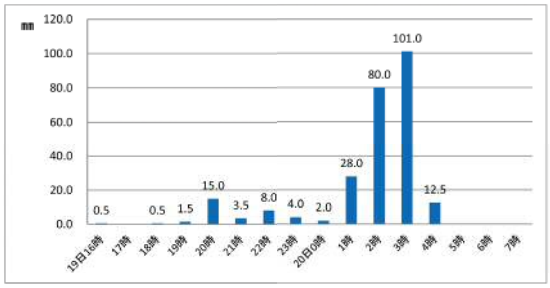

図　三入地域気象観測所の降水量

降雨量が激しくなった午前1時15分には、広島県などが土砂災害警戒情報を発表しています。午前1時からの3時間で200ミリメートルの豪雨が被災地を襲ったわけですが、これだけの短期集中豪雨に見舞われたら、土砂災害の被害発生を免れない場所はいたる所に存在するでしょう。

四十年以上前のことですが、私の親戚が今回の土砂災害で甚大な被害を受けた安佐南区緑井に住

んでおり、その頃に緑井を訪ねたことがあります。当時はJR可部線の緑井駅は今とは比べものにならないほど小さな駅で、駅前を中心に住宅が建ち始めたばかりの、いわゆる新興住宅地でした。もちろん、今回土石流が発生した山の斜面部分には、建物は全く建っていない状況でした。ところが今回訪れてみると、緑井駅前には大きなデパートなどのビル群が立ち並び、片側３車線の広幅員の道路が整備され、土砂災害が発生した斜面までとぎれることなく、住宅が建ち並ぶ街に変容していました。

写真１　JR可部線緑井駅前

人里離れた山の谷合で土砂災害による被害が発生したのではなく、JR緑井駅からわずか数百メートルの距離、駅前の商業施設集積地と隣接して連なる場所を土砂災害が襲ったのです。この緑井地区のみならず、この度の土砂災害で多くの人命が奪われた災害現場はいずれもJRの駅に近く、大規模なマンションや大型店舗が連なる市街地からさほど遠くない場所に位置しています。当初、災害現場全体を撮影した航空写真を見て想像していた状況とは、かなり異なることに驚きを覚えました。さらに、土砂災害に直撃されたエリア内では、新たな宅地開発が進められていた所が何か所もあり、災害危険を有する土地で人口が増え続ける予定であったことがわかります。

写真２　土砂災害の直撃を受けた宅地造成予定地（安佐北区可部東）

道路上の土砂やガレキはほとんど撤去されていましたが、山の谷筋に沿って流出した土砂はその後、住宅が建ち並ぶ地域の水路や道路を流路として、猛烈な勢いで駆け下っていった痕跡が残されています。

写真３　土石流の流路となった住宅地区内の道路（安佐南区八木）

被災した住宅地の中に立ってみると、どこから土石流が襲ってくるのか予測がつかない状況だったことが想像されました。

この度の災害では、70名を超す死者・行方不明が発生してしまった原因について、想像を超える量の降雨があったこと、花崗（かこう）岩が風化してできた真砂（まさ）土であり、土砂災害が起こりやすい地質だったこと、避難勧告の発令が遅かった

こと、深夜の災害であったことなど、いくつもの要因が指摘されています。土砂災害の被害は免れたものの、現場近くに住むかたにお話を伺ったところ、「8月20日の午前1時過ぎからは、あまりにも激しい雨のため心配で眠ることもできなかった。テレビのdボタンを押して、避難の情報が出ないかずっと起きて見ていたが、けっきょく何の情報も流れてこなかった。」とおっしゃっています。しかし深夜に時間雨量100ミリメートルを超す雨が降っている状況で、避難勧告が出されたとしても身動きできなかったであろうし、またどこに避難すれば良いか判断することも非常に難しかったと思われます。

広島で起きた土砂災害で被害を被った地域内では、宅地造成中の土地や売り出し中の建売住宅が多数見られました。

今後、日本の人口は減少していくと予測されているのに、人が生活をする場所は、自然災害の危険性が高い地域に拡大しており、それは広島市に限ったことではありません。近年、異常気象に伴う自然災害が多発し、いつ、どこで、どのような災害が起こるか予測ができないことを、皆が認識するようになってきました。これまでの対策の延長線上で、土砂災害や風水害による犠牲者をゼロにすることはもはや不可能であり、幸いにしてこれまで災害が発生したことのない地域であっても、土砂災害などが起こる可能性があることを、市民も行政も自覚したうえで、都市計画のあり方を真剣に見直すことが求められています。

写真４　土砂災害の被災地域内で売り出し中だった住宅（安佐南区緑井）